

■ドヴォルザーク／序曲「オセロ」Op.93

「オセロ」は、ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）の4大悲劇のひとつである。ムーア人の勇敢な将軍オセロが、彼に不満をもつ部下イヤゴの陰謀により、愛する妻デズデモーナが不貞を働いていると思ひ込み、嫉妬のあまりデズデモーナを自らの手で殺し、真実を知ったあと自害する。

チェコの国民的な作曲家、アントニン・ドヴォルザーク（1841-1904）が序曲「オセロ」を作曲したのには、次のような経緯があった。1891年、まもなく50歳になろうとしていたドヴォルザークは、「自然と人生と愛」というテーマのもとで序曲3部作を書くことを計画し、スケッチを書き始めた。スケッチには、第1曲「孤独の中で」、第2曲「謝肉祭」、第3曲「オテロ」とあり、第3曲には「愛（オテロ）」とも書かれていた。つまり、ドヴォルザークは「オテロ」を「愛」と重ね合わせ、情熱的な愛に取り憑かれ、嫉妬によって苦しむ人間の姿を描こうとしたのである。3曲は「自然と人生と愛」としてまとめられ、1892年4月28日、プラハでドヴォルザーク自身の指揮で初演された。

ところが、ドヴォルザークは出版をベルリンのジムロック社に頼むにあたって、3曲ともそれぞれで一つの作品だとし、別々に出版することを望んだ。3曲目の「オセロ」のタイトルについては、「悲劇的」、あるいは「英雄」でもよいか？と迷っている。結局、「自然のなかで」「謝肉祭」「オセロ」の3曲が、別々の作品番号で1894年に出版された。

曲は「レント（遅く）」の序奏で穏やかに始まるが、下行する音を特徴とする暗い主題が顔を出し、「アレグロ・コン・ブリオ（速く、活発に）」の最初の主題へと発展する。勇壮かつ悲劇的な主題であり、嫉妬に燃えるオセロの心を思わせる。その一方、オーボエと第1ヴァイオリンで始まる新しい主題は、デズデモーナの優しさに通じる。2つの対照的な主題をもとに、音楽はドラマティックに展開される。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート2（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、バスドラム、ハープ、弦五部

※スコア上の表記